

くろぐみだより

第6号 平成24年10月5日

あさひこ tweet...

(10月5日、まさに本番前日の朝)
「あー、緊張する…やっちゃえば緊張しないから、はやく明日にならないかなー」
(by 体もやる気もでっかい、某男の子)

なんだかずいぶんお久しぶりのくろぐみだよりです。「え?まだあったんだ?」と言われそうですが、いいんです。「不定期刊行」ですから!!

さて、いよいよ、明日は運動会ですね。今年は「あさひこ秋祭り」をテーマに運動会をします。楽しみです。

そんな運動会、花形であるバトンタッチリレー、年長さんは、どんな経験をして、今、なにが育ってきているのでしょうか?

運動会前日の今日、それをちょろっとだけ、書いてみたいと思います。ちょろっとだけです。それぞれの子が、クラスが、たくさんたくさん経験した中の、ほんの少しだけ、です。では、どうぞ。

育ちあう、運動会 (副園長)

指導計画にて

8月末。
園長・副園長・主任と、年長担任、補助の先生2名。
毎月恒例の、指導計画(カリキュラム・月案)会議。

もちろん、運動会の話が出る。そこで、今回、議論になったこと。

あるクラスには、障害を持った、Aくんがいる。
Aは、その発達の個性から、リレーに参加するかもわからない。
トラックに沿って走るかもわからない。
バトンを持って走って受け渡せるのかもわからない。
速く走るのは、おそらく難しい。
Aがチームに入ってリレーをすると、そのチームは遅くなる、ということは、予想できた。
Aは、他の子と同じ課題をもって、チーム競技に参加するのは難しい。

で、どうするか、という事だ。
保育の方向性を。

Aを抜いてリレーをするのか。
Aがやりたがらなかつたら、どうするのか。
Aに担任がついて走る?
代走を立てる?
怪我の子と同じ扱い?
いったいどうするのが、いいのだろう?

いろんな意見を出して、話し合いをした。
しかし、行き着く考えは、これに決まっている。
「教育課程にのっとって、保育として、あるべき保育を」、だ。

僕たちは、保育をしている。
スポーツをしているわけじゃない。
バトンタッチリレーを保育でやるということは、どういうことなのか。

これまでの生活の積み重ねから、担任は確信を持っている。
クラスみんなが、Aのことを、好きだ、ということ。

リレーで、みんなが向かうのは、もちろん、「1番」だ。
1番は、うれしい。
1番は、きもちいい。
3番は、くやしい。
3番は、いやだ。

1番になりたいから、勝ちたいから、がんばる。
じゃ、誰かがんばるのか?
「誰か」じゃない。
「みんな」だ。

今まで一緒にいっぱい生活して、いっぱい遊んで、こいのぼりをつくって、お泊まり保育をして、蒲郡との対決ドッチボールをした、そんな大好きな、クラスの「みんな」だ。

みんなってことは、Aもだ。

みんなで、1番を目指す。

勝ちたい。
みんなで勝ちたい。

Aも含めた、みんなで。

「みんな」には、
足が遅い子もいる。
集中力が続かない子もいる。
言葉にできない子もいる。
話を聞けない子もいる。
いろんな子がいる。

そんなみんなと、気持ちよく生きていくこと。

誰かを選抜するんじゃなくて、排除するんじゃなくて、
「みんな」で、考えて、刺激しあって、意見して、ぶつかりもして、
分かりあって、喜びあって、高めあって

「こうやって生きてほうが、幸せだ」

と、感じられる経験を。心と体の経験を。

それが保育。

だから、Aの姿をありのまま受けとめて、それはこれまでの生活の積み重ねで、みんな、できるはずだから、その上で、Aのことを、みんなのことを、みんなの課題にして、それを考えて、
みんなで大きくなる。
それでいいんだ。

そう、それは、Aにとっても。

みんなで、バトンタッチリレーをやろう。
そう決めた、会議だった。

そして某先生が、泣いた。
その思いを濃く受けとめて、その上で、その保育のすばらしさわかる、よさわかる、達成することの喜びも充実もわかる。
そして、そうやって保育することの、大変さ、つらさ、難しさ、プレッシャー、そういったものも、全部わかる。予想できる。
だから泣いた。いろんなものが混じって泣いた。

わたしたちも、「みんな」なのだ。
そう思った。

Bくんと

Aくんとはまた別のクラスの、Bくんのこと。

9/25。

クラスでの、リレーの話し合い。

初めてリレーで走っているときに、Bは途中で止まってしまった。

「Bは、最後まで走ってほしい！」

「そう、そう思う！」

数人の子が、口々に言った。

みんな、Bを責めた。

それはただ、こうしてほしい、との思いだ。

しかしBは、まわりみんなにいっせいに、そのように言われることが、得意ではない。

責められている、と感じただろう。

いままでのBだったら、パニックになっていたかもしれない。

Bは、静かに言った。

「みんな、ぼくのことか嫌いなのか？」

すると。

間髪置かずとなく。

さっきまで、Bに意見を言っていた子達が、口を揃えるように言った。

「大好きだよ！」

こどもは、他のこどもを真似する。

年長にもなれば、自分の本意でなくても、その場の空気を読んで、発言することもある。

しかしそのときその言葉は、まったく同じタイミングで、たくさんの子の口から出たのだ。

真面目でおとなしい女の子も言った。

「大好きだよ」「好きだよ！」

口の悪い男の子も言った。

「大好きだよなあ！」「(隣の子に)お前もだろ？」「おお」

その日まで積み上げてきた、年長の生活…いや、それはひょっとしたら、年少からずっと、その日まで、彼らが一緒に積み上げてきた毎日が、その言葉を、瞬間に、口から出させたのだ、と思う。

そして話し合いは続いた。

こうしてほしい、こうするといいよ、と。

Bは、最後に言った。

「うん、ぼく、がんばるよ」

10/3。

Bのクラスでは、赤白各チームに分かれて、「もっとがんばれることは何か？」を、こどもだけで話し合おうというところだった。

Bの白チームは、話し合おうとした矢先に、男の子Cが、いやなことがあって、簡単に言うと、スネってしまった。

みんな、声をかけて話し合いをしようとするが、Cも意地になってしまっている。

少しずつ、やっと、Cの気持ちが話し合いに向き始めると、今度は、他の子がスネはじめた。

結局、話し合いが始められないまま、給食の時間になった。

それで、赤チームに給食を支度してもらい、その間に白は改めて話し合うことになった。

でも、またスネはじめたC。みんな揃っての話し合いが始められない。

そんなうちに、給食の支度も終わってしまった。

そして、Bが言った。

「僕は、みんなでやりたかった。

そんな風にスネてたら、みんなバラバラだよ。

僕は、そんなリレー、やりたくないよ」

ポロポロと泣いた。

「Cなんて、大っ嫌いだ」

Bは、そう、泣きながら言ったのだ。

以前のBであれば、考えられない姿だった。

Bの気持ちが、「みんなでがんばる」ということに、向いていた。

「Bくんは、どうしたかったの？」担任が聞く。

「Cも、みんなでやりたかった」

「じゃあ、その気持ちを、Cくんに伝えてみる？」

そして、BはCに気持ちを伝え、「Cくん、ほんとはどんな気持ちなの？」と聞いた。

Cは答えた。

「…ほんとは、リレーがやりたい」

給食を食べ終わった後、Cは、「話し合いしよう」と言った。

そして、お帰りの時間、白チームは、みんなで話し合った。

Bも、Cも、みんなで。

正直な思いを出せばいい。

そのときのありのままの自分を、出せばいい。

そこから、始まる、どんなことも。

友達のことを、不満に思ったり、それを口に出したりするのは、「やさしくないこと」なんかじゃない。

「やさしさ」を獲得する、道の途中だ。

今まで、「自分のこと」を考え、「自分が早く走ること」「自分がかんばること」に満足していた子が、友達の姿に、課題を見つける。

それでいいんだ。

そうして、成長していく。

10/4。

朝の自由保育の時間、園庭に線引かれた狭いトラックで、年長がバトンタッチリレーの練習をしていた。

ほぼ全員の子が、すでに集まって練習している。

トラックの中に、順番待ちの子が納まるのもつらいくらいの大人数。

そのとき、走者の順番待ちの列に体操座りで座りながら、Cが、Bの背中を、小突いたり、軽く蹴ったりしていた。

そのうち、先生が、Cに聞いた。

「なんで、Bの背中を蹴ったりしてたの？」

「…だって、Bが、全然前につめてくれないから」

Bも答えた。

「だって、Dが前に行ってくれないから、僕も前にいけなかったんだよ」

そして、Bは、いやになったのか、走って部屋に戻っていってしまう。

担任は言う。

「ねえ、Bくん、部屋に行っちゃったけど、Cくんはどうする？」

Cは、無言のまま、少し考えたあと、ゆっくり、部屋に向かって歩き出した。

少しずつ、歩きが早くなり、最後は走って、部屋に向かった。

担任は、それをそっと追って、やりとりを見ていた。

Cが部屋に着いた。

誰もいない部屋で、Bはお茶を飲んでいて。

Cは言った。

「…B、お茶飲んだら、一緒にリレーしようぜ」

「うん」

そしてふたりで園庭に戻ってきて、また、リレーの練習を始めた。

感じている。たくさんの方の気持ち。

そして、育つ。「育ちあう」。

Aくんと

みんな、Aのことが好きだ。
それは間違いない。
一緒に手をつないで歩くのが好きだ。
ふと、通じ合えたとき、みんなとてもうれしそうな顔をする。
Aのことが好きだと、それはすぐわかる。

Aは、年少のときに読んだ月刊絵本の1シーンで、「ウサギがかけっこしながら転んでいる」という絵が、ものすごく好きだった。

それ以来、Aは、かけっこのときに、必ず転ぶ。
それがAのこだわりで、年長になっても、必ず、転ぶのだ。

Aは、足が遅く、かつ、必ず転ぶ。
Aが走ると、他のクラスと、0.7~1.3周くらい、必ず差がつく。

バトンタッチに気持ちが向いて、夢中になればなるほど、Aのこと、Aの遅さが、みんな気になっていた。

それでも、Aのことを悪く言う、不満を言う子は、いなかった。
それは、おそらく、「Aのことをよく理解しているから言わない子」と、「言っても通じないからあきらめて言わない子」がいるようだった。

次第に、みんなの前で意見としては誰も言わないが、練習のときなどに、ふとしたつぶやきのなかに、気持ちが表れはじめた。

「Aが、もう少し速く走ってくれたらな…」
「Aが、転ばずに走ってくれたらな…」

みんなで集まって話をしているとき、担任は言った。
「思ったことがあったら、どんなことでも言っているんだよ。言って、みんなですぐにどうしたらいいか考えようよ」

そしてこどもたちは、やっと、言った。
「Aくん、もうちょっとでいいから、足が速くなってほしい」
『もうちょっと』、実に、この子たちらしい、やさしい言葉。

そして、話し合いが始まった。
はじめて、Aとみんなが向き合ったのだ。

Aには、できることと、できないことがある。
そしてそれは、他の人とは少し違う個性として存在する。

それを、クラスみんなは、受けとめ、すこしずつ理解しながら、じゃあ、どうすれば、Aがやる気になるのか、Aが速く走れるのか、転ばないのか、それを課題として、みんなで考えてきた。

はじめは、「どうせ無理」と思っていた子も、たくさんいた。
でも、改めてAと向き合えたことで、いろいろ考えて、やってみて、Aに働きかけ、言葉がけてきた。

Aに働きかけ、気持ちが通じ合える瞬間を、みんな、とても喜んだ。
通じ合えたことを喜んでいるのは、みんなだけではなく、Aもだった。
Aと通じ合った時の、互いの喜びを、クラスの子は30人みんな味わってきた。

Aが、自分の思いをことばで言えない分、みんなでAの気持ちを考え、感じ取り、一人ひとりが関わった。

Aにとっても、他のみんなにとっても、それぞれの課題があり、その課題と向き合い、みんなで乗り越えた。

本番は、3人の子が、Aの近くを走って、Aを応援することになった。
そして、Aが転んだら、3人で起こす。
もともと、転んだのを起こすのは、担任がやっていた。
担任がやったほうが早い。それはみんな知っているだろう。
でも、自分たちで起こす。

自分たちのリレーだから。Aは、自分たちの仲間だから。

そしてそうやって、みんなと一緒に走るのが、Aはとても、うれしそうだった。

リレーを嫌がる姿は、なかった。
先生がいなくても、クラスの大勢とAと一緒にあって、みんなでAを囲んで走る練習をしている風景を何度か見た。
Aは、満面の笑みで、嬉しそうに走っていた。

Aは、このリレーの中で、決して、「ハンデ」なんかじゃない。
「みんな」だ。仲間だ。
本当に、大きくなった。
30人で、育ちあった。
育ちあう、仲間なんだ。

運動会へ

明日は、みんなで、1番を目指す。
勝ちたい。
ゴールを目指す。

そのゴールの先に、「幸せに生きる」ということが、待っている。

そう確信して、ほくたちは、あの子たちみんなを、見守ろう。

これでいい。

積み重ねた、毎日。
10月、秋の風が吹く。
グラウンドの土も、少し冷たくなった。
今まで、ずっと。
大きくなった。育ちあった。

さあ、運動会だ。

あさひこ幼稚園 2012 年長 教育課程(抜粋)

第14期 8月28日~10月6日 29日(6週)

・発達の姿

自分のイメージをはっきり持ちながら、友だちの意見も受け止めて遊び、自分の課題に一つ一つ取り組み、達成感を積み重ねていく時期

・ねらい

- ①クラスや園の環境に目が向き、自分がどうしたらよいか考えて行動しようとする。
- ②自己発揮しながらも、友だちの思いを理解しようとし、目的を共にして活動しようとする。
- ③自分のイメージをしっかりとって、目的に向かって素材や表現方法を工夫して遊べるようになる。

・内容

- ①集団生活のために時間を守って、活動に区切りをつけて、始めたり、終わったりする。
- ④グループやクラスの活動のなかで、話し合いに参加して自分の意見を発言したり、自分の役割を果たしたりする。
- ⑤遊びやクラスの活動のために必要なルールや約束をみんなで作っていく。
- ⑦チーム意識や、競争意識を持って、全力を出して集団遊びに取り組む。